わたしのフォトメモ —— ディテール編

大野博史 =文・写真
HIROFUMI OHNO

柱の秩序から解放された壁面

学生時代、長いヨーロッパ旅行の末に北部イタリアのコモに辿り着いた。

お目当ては「カサ・デル・ファッショ」[＊1] だった。イタリアからの留学生に訪れるべき建築のひとつとして教えられ、そのまま旅行の計画に取り入れたのだが、ヨーロッパを回るうちに旅先のユースに滞在する建築学科の学生たちから「コモに行ったら、「サンテリア幼稚園」[＊2] に行くべきだ」と何度か聞かされ、いつの間にかお目当てはそちらになっていた。

実際、訪れた「サンテリア幼稚園」は、「カサ・デル・ファッショ」に比べて、水平性を強調する空間構成と、単純明快な構造体の配置とその立面（とりわけガラス面）とのさわやかな分節方法、さらには園児用のかわいらしい家具と建築プロポーションの妙と、大変心に残る建築であった。

構造体の規則的な構成は、「カサ・デル・ファッショ」に引き続き守られながら、壁面はその規則から逸脱する自由な形式をとっているため、内部空間には水平性が強調され、建物の輪郭がぼやけた流動性となって立ち現れている。例えば中庭に面する廊下では、柱の内側に壁を配置し中央に水平連続窓を設けることで、視線は水平方向に抜けていく。また、ガラス面が柱の外側に配置された園庭側では、外部に設置されたオーニング支持材がガラスを貫通して柱と接続されているため、内部と外部とのつながりを強めているように見える。

ちょうど夏休みであったため、園児たちの姿を見ることはなかったが、「近代建築の5原則」にある自由な壁面、自由な平面といったこととは全く別の次元で豊かな空間が展開され、園児たちに愛されていることが想像できる建築物だった。

そして現在、構造設計という立場で建築に携わりながら、テラーニの言葉を思い出している。

「合理主義は、私たちの建築にとってはその一要素にしか過ぎ無い。合理主義は、“建築”に至る過程であって、“建築”の到達すべき目標ではないのだ」[＊3]。✱

左——ガラス面を貫通するオーニング支持材
上——東側ガラス面　柱手前の壁面にあけられた水平連続窓

おおの・ひろふみ——オーノJAPAN 代表／1974年生まれ。2000年、日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。2000〜04年、池田昌弘建築研究所。2005年、オーノJAPAN設立。
主な仕事：8／5（2007）、NEアパートメント（2007）、BUILDING K（2008）、牛窓のアトリエ（2008）、皇居坂下門手洗所（2009）などの構造設計。

[＊1] カサ・デル・ファッショ（1936）G.テラーニ
[＊2] サンテリア幼稚園（1937）G.テラーニ
[＊3] 杉丸淳「Photo Archives 59 ジュゼッペ・テラーニ [2]」10+1 web site